報　告　第63回　北海道医家邦楽大会の報告

2025年10月５日（日）に標記大会が開催された。当日は札幌マラソンで、会場のホテルライフォート札幌のある中島公園周辺は交通規制があったため、お客様の到着にも遅れが生じた。しかし秋晴れの爽やかな天候で、スポーツの秋ばかりではなく、こちらは芸術の秋の１ページを飾ることができた。本大会は年１回の開催で、札幌市医師会と共同開催となる。

今回のプログラムは14演目を数えた。これまで尺八と箏曲が主だったが、今回は長唄、三線や篳篥（ひちりき）演奏も組み込まれバラエティに富んだ内容であった。札幌圏以外からは、富良野から加藤健先生の尺八、川村大介先生のバイオリンが参加、２人の合奏で「恋の季節」を奏でた。「邦楽大会」ではあるが、バイオリンも邦楽にも使われる楽器でもあり、弦は使うが擦弦楽器なので、箏とは違った味わいが届く。長唄は「秋の色種（あきのいろくさ）」が披露された。佐藤敏文先生は三味線(細棹)の合奏から入り、途中の唄では中高音域で声量のある歌声を響かせた。歌の内容は秋の草花を取り入れ、しっとりと情緒を醸し出す。題名は「種」と書いて「くさ」と読むが、その理由は定かではない。長唄は歌舞伎と共に発展したとのことで、江戸情緒、いや「粋」を感じさせる曲なのだが、ほぼ初体験の身では芸の深みが十分理解できないのが残念であった。まず音の世界を体験することが、勉強への手始めとなる。

箏曲合同演奏では箏２台と十七絃に宮野悟先生（札幌市医師会邦楽クラブ会長）の尺八に加藤先生が加わった。「紅の魔方陣」（水野利彦作曲）には各パートはソロで自分をアピールできる場所が何か所もあった。箏が流水の軽やかさを表現すると、尺八が岩にぶつかって小さな水しぶきを上げる音を呼応させたのが印象的だった。

一方で、尺八は西洋のクラシック音楽も表現できることを示した。杉目正尚先生は、前半でクラシック、後半の部では和風ポップス「いい日旅立ち」「また君に恋してる」を演奏して、尺八の多様性を示した。

沖縄のソウルミュージックを伝えるのが三線。三味線とも違う独自の音色を響かせたのが橋本英樹先生。八重山民謡「クンヌーラ」の他、北海道民謡の代表格である江差追分に自作の伴奏を付けて歌った。十数年の試行錯誤で完成させ、今回初めてお披露目できた喜びで歌声も伸びがあった。

筆者は雅楽の楽器である篳篥（ひちりき）を試みた。北海道大会では初である。古典の曲ではなく「浜辺の歌」を選曲したのは、楽器の音色を知ってもらいたかったからだ。しかし、古典楽器は思ったように鳴らないのも事実。伝統楽器から十分な音を引き出すには時間がかかるからこそ、日々の稽古の大切さが身に染みる。

最後のプログラムで昭和時代の「歌声喫茶」に変わった。尺八２管での伴奏で「里の秋」、「もみじ」を聴衆者の歌声をバックに楽しく締めくくった。

約２時間半はあっという間であった。日頃のおさらいの結果として充実感を味わえるのも大会の魅力のひとつだ。医師会の邦楽大会には流派の制約はないので自分の音楽が表現できることができる。

来年の大会には、道内在住のドクター以外のご家族や医療施設にご勤務の方にも是非ご参加いただきたいと、主催者一同強く願っております。詳細は札幌市医師会邦楽クラブ会長宮野悟か、筆者にご一報ください。

札幌清田病院　後藤（ごとう）　義朗（よしろう）

北海道医師会は、北海道鉄道活性化協議会（会長：北海道知事）の構成団体として、JR北海道をはじめとする公共交通機関の利用促進に協力しています。

会員の皆さまにも是非ご支援を賜りますようお願いいたします。

公式 Web サイト　https://www.hokkaido-rail-k.jp/